

「数字の贈り物」

鞆販売店勤務

(氏名割愛)

私の特技は鍵開けだ。何千通りも組み合わせのある数字錠でもほんの五分あれば開けられる鞆屋の店員だ。

私の働く鞆店では旅行用のスーツケースも取扱う。スーツケースの鍵には数字錠が使用されていることが多い。0から9までの数字をクルクルと回して自分の好きな数字に決める。数字の桁は三行のものがスーツケースの鍵としては一般的なようだ。

この鍵についての一番多い問い合わせが、「合わせた数字を忘れてしまった」というもの。お客様がスーツケースを使用するのはだいたい年に一、二度だから無理もない。大事な大事な鍵だから、と頭をひねって考えた三桁の数字だからこそ次の旅行時期には忘れてしまうものだ。そこで鞆屋の店員、私の出番と相成るわけだ。

鍵の開け方は「鍵」という性質上、残念ながらここでは企業秘密としておこう。そして話は、店にかかってきた一本の電話から始まった。

「スーツケースの鍵の番号がわからなくて開かない。どうにかならないかしら」という

なんとなく聞き覚えのある上品な口調の婦人からの番号だった。もちろん、どうにかなる。私がスーツケース現物を店頭にお持ち頂ければ恐らく開けられる、という旨を伝えると婦人は「それでは今から参ります」と通話を終えた。

一時間ほどして、大きな旧型のスーツケースを転がし婦人が来店された。小柄で可愛い印象だがお年は七〇代に差しかかっているだろう。婦人の顔を見て、先の電話で声に聞き覚えがあった理由がわかった。二日ほど前、スーツケース用のベルトをご購入頂いたお客様だったからだ。その時もたまたま私が接客して「初めて一人で旅行に行くの」とはずんだ声で言い、「年なのにこんな派手な色恥ずかしいかしら」と呟きつつ鮮やかなピンクのベルトを選ばれたお客様だ。その年代で一人旅、というのが印象的でよく覚えていた。「先日はありがとうございます。先ほどお電話いただいた方でいらっしゃいますか」。婦人は恥ずかしそうに、「ええ、そうなの、数字がわからなくて」と私にスーツケースを差し出した。型としては一〇年以上前の物だろう。重たくて角張っている大きな黒いスーツケース。とても丈夫そうな造りで型こそ古いが表面には全く傷みはない。あの鮮やかなピンクのベルトと質実剛健なスーツケースでは、まるで美女と野獣だななどと考えつつケースを婦人の手から受け取る。

「誕生日も電話番号も住所の番地も郵便番号も、思い付くものは全部試してみた

のだけれど全部ダメだったの」と、婦人は悲しそうな顔で言った。「わかりました。数字を合わせてみますので少々お時間頂けますか」。

婦人には椅子にかけて待つて頂くことにして、さっそく数字を合わせてみる。私は婦人の座った椅子のすぐ目の前で背を向ける形で作業を始めた。背中越しに婦人が話し掛けていくる。

「そのケース、古いでしょ。七年ぶりに出したのよ」。

「そうなんですか。それなら合わせた数字も忘れてしまいますよね」。

一瞬、間を置いて婦人が答えた。「うううん、そうじゃないの。私はもともと知らないのよ」。私が答えにつまっていると婦人はこう続けた。「そのケースはおとうさんのなの。二人で旅行に行ってたんだけど、おとうさんが『お前は数字に弱いんだからいじるな』て鍵には触らせなかったの。失礼しちゃうわよねえ」と婦人は続ける。

「おとうさん」と婦人が呼ぶ人は旦那様のことなのだろう。スーツケースのしまわれた七年前に旦那様は亡くなったのではないだろうか。婦人は、おとうさんがいなくなつてから初めて旅行に行くこと、ずっと二人旅だったから一人旅は不安だと、でもそれ以上に一人旅は楽しみだなどをとりとめなく話した。

ピン、というかすかな音と共に数字錠の開く手応えがあった。時間にして五分かかったか、かからないか。「お客様、開きましたよ」私は振り向いて婦人に笑顔で告げた。

「まあ！本当！ありがとう。数字はなんだったのかしら？」

私は婦人に鍵になっていた三桁の数字を教えた。婦人は私の言った数字を聞くと一瞬怪訝な顔をしたが、すぐにパアアつと頬を染めた。「やだわ…おとうさんだったら。はにかんだような少女の笑顔で婦人は囁いた。

「その数字、私達が結婚した日だわ」。七年ぶりに開けられたスーツケースの中にはサイズ違いのブルーとピンクのスリッパが入れたままになっていた。

婦人は何度も何度も礼を言い、店を後にした。店を出る婦人の後ろ姿にびったり寄り添う大きなスーツケースが一瞬大きな背広の後ろ姿に見えた気がした。質実剛健の無骨なスーツケースは案外ロマンチストだったらしい。